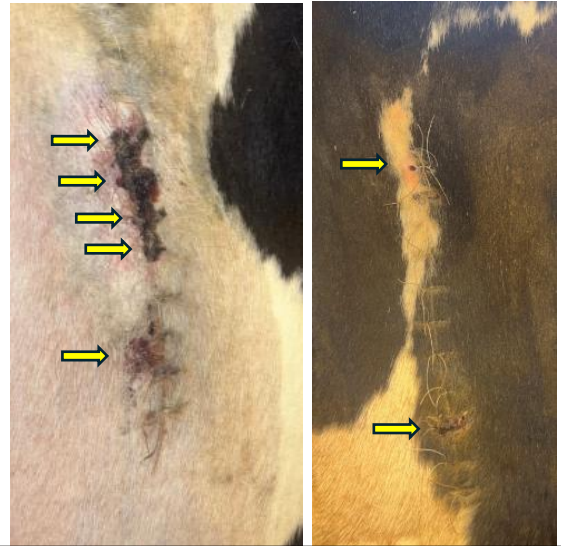


術後の抜糸の必要性

右の写真を見てください。両方とも、術後 1 ヶ月ほど経過して、両者とも泌乳群で活躍しており、別件の診療時に偶然確認した症例です。つまり第四胃変位は治り、術創も癒合しています。しかし、役目を終えた糸に体が反応し糸穴が炎症を起こしている様子です。そして牛は少なからず違和感を覚えているはずです。牛は「糸が気になる」と言葉では言えません。しかし、写真のような状況では、体をこすりつけたり、傷をなめたり、かいたりする行動があるのではないのでしょうか。抜糸をすることで、そのような刺激を減らし、牛がより快適に過ごせる可能性があります。

- 1 抜糸は治療の仕上げ
- 2 糸は役目を終わると異物になる
- 3 抜糸のタイミング（おおむね 10～14 日）
- 4 **抜糸にも正しい方法がある（図解）**
- 5 創部の最終チェックも兼ねる

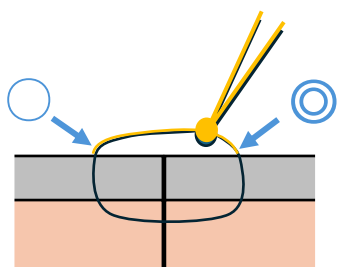


創そのものは離開しておらず、治癒は順調。一方で、糸穴を中心に発赤や痂皮（かさぶた）、少量の滲出・出血がみられる。特に矢印部は、糸が局所刺激となっていることがよく分かる状態です。「糸が残っていることで皮膚が反応している」。

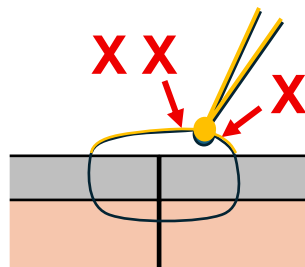
正しい抜糸

タイミング：切開創の癒合は、多くの場合、術後 1 週間ほどで進みます。もしも異常に腫れていたり、膿汁が認められたりする場合は、そのままでは正しい皮膚癒合が望めないため、その部分の縫合を解いて排膿を促すことが必要な場合もありますので獣医にご連絡下さい。何事もなく癒合した創では、約 2 週間後に全抜糸が可能です。確実さを求める場合は、1 つ飛ばしで抜糸（間隔抜糸）した後 1 日置いて、残りを抜糸する方法もあります。お腹の下など抜糸しにくい場所に術創がある場合や、とても過敏な牛では、補助員や枠場内での保定が必要になることがあります。

手技：術創にイソジン液や消毒用エタノールをふりかけ、アルコール綿花で拭いて消毒します。次いで、片手で糸（両方の先端）を持ち、優しく引き上げます。縫合糸を皮膚のキワで切断します。その際に、糸の結び目のキワをねらうのではなく、皮膚のキワをねらうのがコツです。皮膚のすぐ外側、できるだけ皮膚に近い位置で糸を切ります。外に露出していた糸を皮膚の中に引き込まないことが大切です。



○：良い抜糸



X：危険な抜糸

X の位置でカットすると、外に露出していた糸が組織の中を通過することになる。特に XX の位置で切ると、多くの汚染を引き込むことになる。